

論語講義

論語総説

論語とは

論語の名は漢書芸文志によると「論語は孔子と弟子やその時代の人々との問答、及び弟子同士の対話、また弟子たちが孔子から直接聞いた言葉である」と書かれている。つまり、論語は後世の祖録（祖師の言行などの記録）・語録・問答録のようなものである。このほか孔子の普段の生活ぶりや処世（世間で生きていくこと。世渡り）の方法や手段が詳しく記されているので、孔子の言行録と見ることも可能である。江戸後期の漢学者である石川竹厓によると、「論は議・説の意味であり、討論によって物事を明らかに

することである。語は午であり、言葉が行き交うのである。説文解字（後漢の学者許慎によつて作られた中国最古の字書）には論難答述（相手の誤りを論じたて、正しい答えを述べるⅡ討論する）と載っている。論語と名付けた意味は、語の字を主とする。言葉で教えるものは、すべて皆これを語という。孔子の門人や弟子との対話は、皆古代の聖王（堯・舜・禹など）の道を語るためである。それゆえ、これを名付けて語という」この他、国語・家語（孔子家語）・新語の語も同じ意味である。我が国の源語（源氏物語）・平語（平家物語）・勢語（伊勢物語）の語も同じ意味であらう。

論語を編集したのは誰か。

程子（北宋の儒学者 程顥・ていこう

程頤・ていいてい兄弟の尊称）によると「論

語は有子・曾子の門人によつて編集された。よつて論語では有子・曾子のみ子の尊称で呼ばれる」と。佐藤一斎翁によれば「論語は誰によつて編集されたかわからない」三島中洲先生によれば「論語は戦国時代の末に完成した」と。その説明として「孟子が誰に学びたいと願つたかと言え、それはただ孔子のみである。

しかし、その書『孟子』七篇の中に『詩経』『書経』から何度も引用があるにもかかわらず、論語からの引用がないのはなぜか。また孟子のみ引用していないのでなく、戦国時代の学者はみな一語も論語を

引用していない。つまり孟子が生きていた時代には、ただその言葉を伝え聞くのみで、論語は未だ編集されていなかったのである。もしその書（論語）があれば、孟子がどうして読まないことがあるのか。思うに戦国時代の末期、孔子をあがめ尊ぶ人たちがいて、「孔子が亡くなって長い時間が経ち、このままでは書き写された記録文書もまもなく失われてしまうだろう。今これを集めなければ、恐らくそれは永遠に消滅してしまうに違いない」と。この時、孔子の門人の子孫で方々に散らばっていた者たちが、祖先の筆記した記録文書を所蔵しており、ある者は木簡で三、四簡、ある者は竹札で五、六策を所蔵していた。そこで多方面を探し求め、こ

ここでいくつ、あそこでいくつと記録文章
を入手し、それらを集めて編集した。こ
れが論語である。ただしそれを行ったの
が誰であるかはわからない。中洲先生の
説が当を得ているというべきである。

我が国における論語の学び方

論語が我が国に伝来したのは、応神天皇の十六年で、百済の王仁（・わに）が来て論語十巻を献上した。皇太子の稚郎子（・わかいらつこ）が王仁より論語を学んだ。我が国の論語学はここに始まった。文武天皇が大宝元年に出された学令で、鄭玄（・ていげん）と何晏（・かあん）の注釈を用いよとあり、これは隋と唐が採用した制度に従うことである。学者はこれを古注と呼んだ。一方後醍醐天皇の元弘建武の時に、朱熹集注（南宋の儒学者朱熹による論語の注釈書 朱熹 朱子）が伝わった。これを新注と呼ぶ。古注の学者は新注を罵って、みだりに高遠で奥深い思想となし、表で儒道を説き

ながら、裏で仏道を説いている。これは孔子の教えではないと論じた。一方新注の学者は古注を嘲つて、名称、句の意味、章の要旨の末端にまでやたらとこだわり、学問の道の根本を忘れている。文章を暗誦するだけの屑学問に終わり、自分のためにも国のためにも役に立たないと批判した。これは世にいう門戸の見（派閥に偏った考え）である。古注は孔子が亡くなつてからそう遠くない時代に作られたものであるから、そこに書かれている事についてには真実に近いと解釈すべきであり、一概に捨ててはならない。しかし修身齐家（身を修め家を斉える）を実行し効果を上げるには、新注の説に従う方が近道である。しかし新注が高遠で奥深く

実用に適しない点が多々あるのは仕方がないことではある。しかし、うまくこれを除いて孔子を模範として自らが実践することを中心とするべきである。これは折衷学者（両方の良い点を混ぜ合わせた立場を取る学者）の主張する所であり、私も同意見である。慶長元和の時代に藤原惺窩が出て、その門人に林羅山がいた。徳川家康に用いられて新注の立場から論語に訓点を施し、それを道春点（道春は林羅山の号）と称した。それは広く世の中で用いられるようになった。後世、羅山の子孫が大学頭に任命され、幕府の文教（学問と教育）を担当するようになった。朝廷では古くから古注を用いられたが、幕府では開府以来宋学を尊んで新注

を用いた。諸侯（各大名）もまた幕府に倣い、明治に至るまで皆新注を用いた。

孔子の経歴

孔子は史記世家（司馬遷の史記にある名家の記録）によると、今から二千四百七十四年前、魯の襄公二十二年に、魯の国昌平郷の陬邑（・すいゆう）で生まれた。初めは倉庫の役人、その後畜産の役人となり、皆よくその職責を全うされた。三十五歳の時、魯の君主、昭公が、臣下である季・孟・叔孫三家との戦いに敗れ、齊の国に亡命し、孔子もその後を追って齊の国に行き、高昭子（・こうしょうし）の家臣となった。齊の君主景公は孔子が賢者であるのを知り、領地を与えて孔子を用いようとしたが、晏嬰（・あんえい） 晏子とも称される）という者がこれを阻んだ。よって孔子は魯に帰った。四十二歳の時

に昭公が齊で亡くなり、魯では定公が君主となったが、魯の国は大夫（大臣）である季氏が実権を握っていたので、孔子は季氏に仕えようとした。しかし、たまたま季氏の有力な家臣である陽虎とご機嫌取りの仲梁懷（・ちゅうりょうかい）が不仲となり、陽虎が主人の季氏に対して反乱して再び国が乱れ、孔子は季氏に仕えることができなかった。定公の八年、孔子五十歳の時、季氏の有力家臣である公山弗擾（・こうざんぶつじょう）が季氏と仲違いして、陽虎と一緒に反乱を起こし、孔子を招こうとした。この時孔子は行こうとしたが、ついには行かなかった。孔子が五十三歳の時、定公は孔子を中都（・ちゅうと 地名）の代官に任命

した。一年たつと、四方の町が孔子を手本とするようになった。その後、司空（・しこう）囚人の管理。治水と土木工事を司る。当時官の工事は囚人を動員して行われた）から大司寇（・だいしこう）刑罰および警察を司る）に進んだ。定公をよく補佐して齊の景公と夾谷で会談させ、大いに魯の国の威信を揚げた。また魯の大夫（大臣）で政治を乱そうとした少正卯（・しょうせいほう）を誅殺した。それによって三ヶ月で魯の国は安定した。隣国の齊は、それを聞いて魯が強国になることを恐れ、美女の歌劇団を魯の君主におくつた。魯の君主は美女の歌劇団にのめり込み、政治を怠るようになった。孔子はそれを見て、魯を去る決心をした。ああ、孔子の志が

行われようとしたのに阻止されてしまったのである。好事魔多し（ものごとがうまく行きそうなときには、とかく邪魔が入るということ）のたとえに漏れず惜しむべきことである。その後、孔子は諸国を巡り歩き、諸国の君主に仕えた。しかし、その志を實行するにはいたらなかった。やむなく魯に帰ったのが哀公の十一年、孔子六十八歳の時であった。それから五年間七十三歳までは、仕官の思いを断ち切って、もっぱら門人の教育に専念し道德の道を弟子たちに伝えられた。つまり六十八歳まではその志、主に政治の方面に力を尽くし、周の時代（道德による政治が行われた時代）を復興して王道（夏・殷・周時代の理想とされた優れた

王がなすべき道）を天下に施すべく熱心
に活動された。

孔子の志

こうして孔子の経歴を見ていくと、大聖人の孔子にして魯の反臣である季氏に仕えようとし、また季氏の反臣である公山弗擾の招きに応じようとしたばかりでなく、諸国を巡り歩いて仕官しようとしたのは、なんとも大義名分（人として、臣民として守るべき節義と分限）をわきまえていないように見える。けれども中国の国体（国のあり方、国家の根本体制）は、我が国のそれと大いに異なり、万世一系（天子の血統が永遠にわたって、変わらぬ）の天子ではないだけでなく、当時も戦国の世の中であつたので、必ずしも名分（立場・身分に依りて守らなければならぬ道義上の分限）だけを抛り

所に出来なかつたのである。孔子の志はどこの国でもかまわない、またどこの君主でもいいから、我が道である王道を實現するという決心であつた。これは孔子が自分の志に忠実であつたからであり、王道が実践されていた周の時代を復興し、民衆に太平を謳歌する楽しみを受けさせたいと熱中されたのである。その志は、小国の魯を周の勢いが盛んであつた時代に戻そうとすることにあり、孔子が志を實現できず魯を去る時には忸怩（深く恥いる）としていかにも去りがたい趣であつたと孟子も伝えている。当時の孔子を取り巻く状況は察するに余りあるものであつた。孔子が六十八歳の老境（年老いた境遇）に至るまで政治に執着せず、

もつと早くあきらめて門人や後進の教育に力を尽くし、道を伝えたならば、孔子にとつても天下にとつても利益であつたらうという人がいる。いかにもそうであつたかも知れないが、前にもいう通り孔子の志はもつばら王道の復興にあつたのであり、他を顧みる暇はなかつたのである。この老人渋沢もすでに八十四歳に達し、引退してゆつくり過ぎし、自分を磨いたり、立派な家庭を築く道を説くらしいにしておけばよいという人もいるかもしれない。もちろん私は、あえて自分を孔子に似せたり、比べたりするつもりはないが、しかし孔子のこんな態度はぜひ見習いたいと思つている。つまり、孔子は自分が出番をもらえば、きつとその

国の政治を改善できると信じ、招かれればどんな国にも仕えていた。同じようにこの老人も出番をもらって奔走すれば、あるいは少しでも世のため、国のため役立つことがあるのではないかと思うのだ。だからこそ電燈問題が起これば手を出し、アメリカとの問題が起これば奔走し、中国と問題が生ずれば顔を出したりしている。孔子がその志に純粹であつた動機を学び、多少なりとも国家や人々の幸福増進の道に向かつて貢献したいという精神こそ、私のささやかな気持ちに他ならない。

孔子の人となり

孔子の人となりは、一言でいえば常識の非常に発達した円満な人である。古来よりいわゆる英雄や豪傑は世間一般の人と比較して卓越した特色や長所があると同様に、非常に大きな欠点もあるものである。しかるに孔子は特別な長所がない代わりに、非常な欠点や短所もない。ゆえにこれを称して偉大なる平凡人といつてもよいだろう。すなわち人は釈迦やキリストであることは難しいが、孔子であることは難しいことではない。われわれは非凡なる釈迦やキリストであることは不可能だが、平凡の発達した孔子であることは可能である。このためには（孔子であるためには）、ひたすら努力あるのみ。

私は深く孔子に学んでその教訓を守つて
いけば、家庭においても、世間において
も、非難されることのない円熟円満な人
間となることができると思じている。

儒教は宗教か

孔子の教えは宗教であろうか。孔子は儒教の大家（その分野でもつとも権威のある人）である。孔子の教え、すなわち儒教が宗教であるかないかの問題は、論語がいかなるものであるかを講義する前に、まずこれを研究せねばならない。文学博士井上哲次郎氏は「孔子の教えは半ば宗教で、少なくとも宗教らしい所がある」と確信を持って言われ、これに対して法学博士阪谷芳郎氏は「全く宗教ではない。孔子は単に実践道徳を説いたに過ぎない」と反論された。私が考えるに、孔子は論語全篇中の九箇所て天に対する信仰を言明されている。ことに八佾篇で「罪を天に獲れば禱る所なし」と明言されているところから

すると、孔子が天を深く信じ、これをその信条とされたのは自ずから明らかである。すなわち孔子の教えは確かに半ば一つの宗教であると断定された井上博士の説ももつともである。これに反対する阪谷博士の説は「おおよそ宗教という宗教は必ず祈祷礼拝の形式を備えているが、孔子教すなわち儒教はこの形式を備えていない。ゆえにこれを宗教と見るべきではない」との考えである。未だにすぐにその是非を断定できないとはいへ、私は儒教を宗教であるとは信じておらず、ただ実際に身を修めて世に処するにあたり、人の人たる（人として守るべき）規範を説かれた教えとしてこれをかたく守り、論語の所説に従って実践に努めていくのみである。

なぜ論語なのか

そもそも儒教を信奉するといつても、学ぶべき四書の中には大学もあり中庸もあるにもかかわらず、これを学ばず、ただ論語一つを選んでこれを尊ぶのはどういう理由かという人もいるかもしれない。私が論語を選んでこれを一生守るべき手本としたのは、大学はそれが真つ先に明言するごとくに治国平天下（国を治め天下を平かにする）の道を説くことを主眼としており、修身齐家（身を修め家を斉える）よりもむしろ政治に関する教えを重視している。中庸はさらに一層高い見地に立ち哲学に近く、修身齐家の道から遠ざかっている。しかし論語は一言一句ことごとく日常の処世上（世の中を渡つ

ていくこと）の実際に応用できる教えである。朝にこれを聞き夕べにこれを実行し得る程の道を説いている。これが私が孔子の儒教を尊ぶにあたって大学、中庸に拠らず、特に論語を選んでその教えを心に刻んで忘れないようにし、一生これにそむくことがないように決心した理由である。私は論語の教訓を守っていけば、人はよく身を修め家を齊え、安穩無事に世の中を渡っていけるものと確信している。

経営者の行動規範

私は明治六年に大蔵省を辞職し、実業界に身を置くことになった。国を強くするにはまず国を富ますことが必要であり、国を富ますにはまず農工商の実業を盛んにしなければならぬ。とりわけ私は商工業を盛んにするには小資本を集めて大資本とする合本主義で行うこと、つまり株式会社によつてでなければならぬと信じ、あえて第一銀行を設立し、その他各種の会社の設立に力を尽くしたのである。そもそも会社を経営するのにまず必要とされるのはこれを経営する人物である。経営者として相当の人物が得られなければ、その会社は必ず失敗する。明治の初めに政府が設立した開拓会社や為替会社がほとんどつぶれたのは

そのよい例である。よつて私は銀行や会社の経営を成功させるには、その経営に当たる経営者が、事業においてまた自分の身を処する（自分の置かれた境遇において取るべき行動）上において、慎んで従うべき行動規範がなければならぬと考へた。

行動規範を論語から取る

私には仏教の知識がなくキリスト教にいたってはさらに何も知らない。だから私は実業界に立つて自ら守るべき行動規範を仏教とキリスト教から取ることができない。けれども儒教であれば不十分ながら幼少時より親しんできた。特に論語は日常の生活態度を守り、世に処する（世間・社会で生きていく）方法を詳しく示してくれているので、これに従えば人としての道に反することなく、物事はすべて円満に進んでいく。何か判断に迷うことがあれば、論語を物差し（尺度）にしてこれを判断すれば、判断を誤ることはないと堅く信じている。我が国には応神天皇の御世から、このような尊い物差し（尺度）が伝わってい

るにもかかわらず、これを高閣に束ね（書物を高い棚の上に束ねてのせたままほうつておくこと）て顧みず、他に模範を求めようとするのは心得違いである。私はこのように信じて論語の教訓を金科玉条（この上なく大切にして従うべききまり）として、その教えをしつかりと心に刻みつけて自ら実践することを怠らないのである。

論語の教訓

実業家が守るべき論語の教えは一つだけではないが、中でも里仁篇の「富と貴とはこれ人の欲する所なり。されどその道を以てせざればこれを得るもおらず。貧と賤とはこれ人の悪む所なり。されどその道を以てせざればこれを得るも去らず」という教え、また同じ篇に「利に放つて行えば怨み多し」の教えがある。この二つは実業家が生涯慎んで守るべき大切な教えではあるまいか。人が生きていく上で先立つものといえれば財産金銭である。これがなければ人生は一日たりとも立ちいかない。人の地位もまた同じである。なるべく高い地位に立たなければ、世の中の信用も少なく何をするにもうまくいかない。けれども正当な方法でなく

無理をして得た富や地位は永続せぬものである。これとは反対にいかに貧窮しまたいかの下賤な地位にいたとしても、それが自然にやって来た運命であるならば、致し方ないと観念して善行を積むより他ないのである。無理にそこから抜け出そうとすると、必ず法を犯して人を害するような悪事を働いてしまう。また自己の利益のみを主眼として行動すれば、必ずや他人の恨みを買ひ、非業の死を遂げることがあるやもしれない。これらの教訓は実に我々が日常守るべき大變すぐれた教訓ではないだろうか。

実業を論語に一致させる

総説を終わるにあたり一言いっておかねばならないことがある。儒教と経済との合致、すなわち教えと行いを合一不二の（一体にして二つにわけられぬ）物とすることである。儒教すなわち孔子の教えは、もとより紙上の空論でもなく、ただ立派なだけの話でもない。一つ一つこれを日常生活で実行すべき道である。人間は血液の循環する生物であるから、衣食住の欲求はあつて当然である。衣食住が与えられるのは経済によつてである。人の道も礼節も経済を離れて行われるものではない。ゆえに「衣食足りて礼節を知る」という古訓（古くから伝わる戒め）があるのだ。食べるものがなく、着るものもない人に

向かつて、仁義忠孝の道を行え、礼儀作法を行えとはいえまい。いま論語の説く所はことごとく人間の実際の生活を離れず、名教（人のふみ行うべき道を明らかにする教え）と実用（実践）とが完全に一致しているが、宋の儒学者であつた程子（程顥、程頤の兄弟）や朱子の解釈は、高尚遠大な理学（宇宙の本体とその現象を理気の問題で説いた哲学）に向かい、やや実際の行いとは遠ざかつてしまった。我が国の儒学者藤原惺窩・林羅山は、宋の儒学者の悪弊（弊害を伴う悪習）に影響され、学問と實際を別物と見た。荻生徂徠に至つては、学問は上級武士が修めるものであると明言し、農工商の実業家を学問の圏外に排斥してしまった。徳川

氏三百年の教育はこの主義に立脚したもので、書を読み文を学ぶのは実業に關与しない士人（武士）だけがするものとなり、農工商多数の国民は国家の基礎となる諸般の実業を担任（仕事を受け持つこと）すれども、書を読まず文を学ばず無智文盲漢（漢＝男性一般）となつてしまつた。この悪い習慣が長く続き、それが生まれつきの性質のようになり、事業と學問は全くの別物となつて、それが当たり前となつてしまつた。武士は氣位ばかりが高く農工商を下民と見て賤しみ、農工商は武士の自立自存（他人に頼らず自分の才覚で生活すること）する道を知らないことを嘲つて、青表紙（儒学の經書）読み四角の文字（漢字）知りと罵つた。

人類が均く皆心に留めて忘れてはならない論語の明らかな教えを、ただ少数の武士階級のみを教訓としたのでは、惜しんでも惜しみきれない。私は堅く信じる。学問は学問のための学問ではない。人間の日常生活を導いていくための学問である。つまり学問は人が世を処する上での規範である。それゆえに實際を離れた学問はないと同時に、学問を離れた実業もまた存在しないのである。こういうわけで、私は普段から論語と算盤説を唱え、実業を論語に一致させようと計画し、私が尊敬する故三島中洲先生も同工異曲（外見は違っているようだが、内容は同じであること）とでも言うべきか、論語と経済を一致させようと説かれたのである。

なぜ論語を講義するのか

これは要するに中洲先生も私も共に学問と事業を結びつけて睽離（・きり 互いにわかれ わかれになること。そむき離れること）せぬようにし、そして「知行合一（知識と実践を一致させる境地の極地）」に到達しようとしたのだ。私はこの知行合一の見地に立って論語を咀嚼し、八十四歳の今日まで公私内外（公務と私事、内面と外面）の基準として尊重し、国を富まし国を強くすることによって天下（世の中）を太平に導く努力をしてきたのである。他の実業家達にも、ぜひ論語をよく読んでもらい、民間に知行合一の実業家がぞくぞく輩出して、品位（人格）の高い先覚者（他に先んじてそのことが大事であることを悟り実行する人）が出ることを望むのである。こ

れゆえ、私は学問もなく、もとより専門の漢学者でもないが、あえてその点は考えずに、ここに論語の講義をしようとするのである。多くの人々が、幸いにも私の浅はかで劣った行為をとがめず、論語の講義を愛読していただき、共に東洋の仁義道德を盛んにしてこれを広め、身を修め（人格を磨き）世に処する（世間を渡る）規範とされることを願うのみである。重ねて一言いわせていただくと、儒学の教えは実業によつて貴く、農工商の実学は儒学の教えによつて光を放つ。二者（儒学の教えと実業）はもとより一致し、決してそむき離れることは許されない。もし二者（儒学の教えと実業）がそむき離れば、学問は死物となり、儒学の教え

も紙上の空論となり、論語読みの論語知らずといわれるに至るであろう。そして農工商に従事するものは、思想の低い賤しい人間となり、輝くことのない実業で終わるだろう。だからこそ二者（儒学の教えと実業）を一致させ、知行合一の境地にたどりつくことを願ってやまない。この考えを抱いて、八十年來の私自身の実体験にもとづき、あえて論語を講義するのである。しかし私は多忙で自ら筆を取ることができないので、話した内容を尾立維孝氏に筆記してもらおう形とした。読者にはよくご了解いただきたい。